

整備された大学正門

松涛

No.27

2011. 3. 10

主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
支部だより	5
職場紹介 株式会社 雪国まいたけ	8
特集 猛暑、温暖化、その影響と対策	9
特集「農学部附属の農場・演習林」を訪ねて	10
ペンリレー 同窓生からのたより	12
農学部フォーラム	14
国際交流	14
学生の就業力について	15
同窓会会計報告	17
データでみる最近5年間の就職事情	18
学部だより	19

学部長挨拶

農学部長

大山卓爾



国立大学法人に移行して6年が経過し、第一期(平成16年度から21年度)の実績について、学部ごとに教育と研究に関する厳格な評価を受けました。

農学部は、教育の実施体制、教育内容、教育方法、進路・就職の状況で『期待される水準にある』との評価を得、学業の成果では、『期待される水準を上回る』との高い評価を頂きました。研究についても研究活動の状況では、『期待される水準にある』研究成果の状況では、『期待される水準を上回る』との高い評価を得ました。新潟大学農学部は、58名と全国の国立大学農学系学部でも最小人数ですが、今回高い評価を得られたのも、農学部同窓会をはじめ多くの関係者の皆様からのご支援の賜物と感謝申し上げます。

最近の農学部の話題をいくつか紹介させていただきます。

平成21年度に実施した農学部B棟

改修に続き、平成22年度、A棟と玄関の耐震工事が行なわれています。

同窓会から御寄贈頂いた樹木を出来るだけ残す様に努めました。残念ながら工事の都合でかなり伐採せざるを得ませんでした。農学部五十嵐移転後40年の歳月により、A棟前のヒマラヤ杉も5階まで達していましたが、地下のパイプラインの工事のため全て伐採せざるを得ませんでした。C棟も含めた耐震工事完了後に、同窓会の皆様とも相談しながら、学生の憩いの場として、構内の緑化整備を進めて参りたいと思っております。

農学部では、新潟大学朱鷺プロジェクトに多くの教員が協力しています。また、平成22年度から5年間、新たに「朱鷺の島環境再生リーダー養成ユニット」が始まりました。これは、自然豊かな佐渡を守り育てるリーダーを養成する教育コースで1年間の講義と実習を行います。本プロジェクトには老若問わず、意欲的な社会人が多数参加されています。

また、本年度より、文部科学省の

教育支援プロジェクト「大学生の就業力育成支援事業」に農学部から申請した『インターシシップ実質化による就業力の獲得』が採択されました。新潟大学農学部では、学生の就職率はほぼ100%と全国の農学部でトップ、全大学の学部を通して全国3位ですが、今回のプロジェクトを通して、卒業後に主体的かつ意欲的に仕事を続けられる人材の養成を目ざしています。インターシシップの実施等では、卒業生の皆様のお力もぜひ御借りしたいと思っております。

平成22年、8月31日、9月1日に、秋田県立大学生物資源科学部、山形大学農学部と新潟大学農学部の三大学合同研修会を初めて行ないました。教員だけでなく、事務職員、技術職員の方も参加し、秋田、山形から各大学から、教育の特徴的な取り組みやフィールドセンターの紹介とともに、「水田農業をどう打開するか―現状と課題」について討論しました。

以前は、山形大学と親善野球が定期的にもたれていましたが、最近は交流が途切れていました。今後とも、水田農業を中心とする日本海側の農学系学部として協力して行こうということで、来年度は山形大学で、再来年度は、秋田県立大学で合同研修

会を実施する事になりました。これからは、競争だけでなく、多面的に協力して行こうという事でおおいに盛り上がりました。

農学部の国際交流も活発に続けております。平成22年の1月にはマレーシアのプトラ大学で開催された第2回農学部国際学生シンポジウムに学生2名と引率として長谷川先生が参加されました。平成23年7月には、第4回農学部国際シンポジウムを中国ハルビンの東北農業大学で開催予定です。協定校も増え、ボゴール農科大学(インドネシア)、モンゴル国立農業大学、嶺南大学校自然資源大学(韓国)、チェンマイ大学(タイ)、ワヘニンゲン大学(オランダ)、中国農業大学、キングモンクト大学(タイ)、アンカラ大学(トルコ)などの大学から参加予定です。これらの活動の資金として、同窓会からのご援助とともに、農学部国際交流基金の応募もしております。随時受け付けておりますので、国際交流にご協力頂ける方は、農学部事務に振込用紙をご請求ください。

私の学部長の任期は平成23年3月で終わります。十分な舵取りもできませんでしたが、4年間の在任中、進藤会長様をはじめとする同窓会の皆様からの暖かいご支援とご好意に心より感謝申し上げます。

同窓会長挨拶

同窓会長 進 藤 隆



今夏の猛暑は百十数年ぶりといわれていますが、会員の皆様におかれましては、

ご健勝のことと拝察いたします。

この猛暑で日本一の食味を誇ってきた新潟「コシヒカリ」の品質低下をもたらした新潟県下の稲作農家に深刻な打撃を与え、今後の対応に苦慮しているところです。

県職員・農協等で生産者に直接対応している卒業生の皆様のご苦勞をお察します。

水戸三夫先生の「作物学」の授業を思い出しているところです。

昨年5月の常任幹事会で卒業生の就職決定が100%とのお話を伺ったとき素晴らしい結果で先生方・学生の皆様のご尽力・努力に敬意を表する次第です。

その先生方、学生が日々研鑽されておられる校舎が昨年はB棟が耐震補強を伴う大規模改修で見違えるような素晴らしい校舎となりました。そして、今年度はA棟の改修が行わ

れております。

私はある人に「大学を見るとときにはキャンパスの樹木と図書館を見ろ」といわれましたが、そこに無言の歴史を感じ取れるのではないかとおもいました。

その意味で母校のキャンパスは改修工事やむを得ないことですが同窓生のご尽力でできた「風丘庭」、前庭の樹木の多くは伐採され現在は寂しい状況です。

大山学部長も心配され同窓会への協力をお願いしたいとお話しをされておられます。私も後輩の学習環境を整えることは極めて重要なことと受け止めており、この分野に携わっておられる同窓諸兄の叡智を結集して今までの以上の景観を醸成したいと考えております。

この事業を完成させるためには同窓会創立60周年記念事業を視野に入れるのが最適ではないかと考えており、来年度の幹事会に諮り早急に具体的取組を行いたいと思います。

一方、同窓生の交流の場として都道府県支部の活動が活発に行われておりますが、同窓生の最も多い新潟

県支部を立ち上げるように昨年度よりいわれ、今年度の予算にも若干の準備がなされながら、私の努力不足で具体的進展がなされておりませんでした。

今年度中に第一回発起人会を開催し、次年度には第一回支部総会が開催できるよう準備を進めたいと思っております。その際は、新潟県内在

住の同窓生の積極的なご協力を切にお願い申し上げます。

本会が会員相互の交流と親睦、母校の益々の発展と充実が図れるよう役員と共に努力しますので一層のご支援とご協力をお願いいたします。

会員の皆様のご健勝とご発展を祈念し、会長の挨拶とさせていただきます。

2010年度活動計画

幹事長 新村 末雄

農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。また、全学同窓会にもこれまで通り協力していきます。

2010年度は、主として以下の活動に取り組みます。

1、「松濤」27号の発刊

充実した内容を企画して読まれる会誌を目指すとともに、文字を大きくして読み易い誌面にします。

2、同窓会ホームページの維持新しい情報をお届けできるよう更新に努めます。

3、支部活動の支援各支部の活動をより一層支援します。

4、学内諸行事への支援「卒業祝賀会」を支援します。退職

者に記念品の贈呈を行います。

5、学術・文化活動への支援

農学部や各学科が行う学術・文化活動を支援します。

6、受験者増加への取組みに対する支援

「高等学校での出前講義」や「高等学校での説明会」に行くための旅費の支援を行います。

7、全学同窓会への協力運営委員会への参加、カード入会事業の協力、大学との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の

発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

農学部を去るにあたって



退職にあたって

堀 秀 隆

(自然系大学院自然科学研究科)
(応用生物化学科)

自然科学研究科専任教員として14年間働いた新潟大学を退職いたしました。沢山のご指導を頂き大過なく過ごせた新大での体験が懐かしい物になるでしょう。

思い起こせば、筑波大研究生から米国テキサス・サンアントニオ医科学研究所に留学した時と、新大で研究・教育者として生活を始めた時が、この選択に成功出来るかと強い不安に悩んだ二度の大経験でした。医科研では土日も休まない研究生生活の中で成功への自信を感じたのは2年ほど経ってでしたが、大学では教員と研究者の二足の草鞋を穿けると思えるには6年位掛かりました。云うまでもなく大学教員が、独創的研究を国際誌に書き続ける研究活動、院生を育てる教育活動、更に研究費を集めるラボ経営活動の3役をこなす大

役であるからで、3役の操縦をどうこなすかは大学人の大きな課題になるでしょう。

大学教育は知識の切り売りではないと言われます。同感で、学士、修士、博士論文指導で目的、方法、考察を共に語り、自立した学生を創る事が高等教育の目的と真の教育実践であると新大での勤務で確信となっています。経営者としての集金は極めて難しく、成否は研究テーマに依存し、他の二つの活動と鋭く対立し、矛盾に直面してきました。私の専門は基礎科学で、社会的要請の強いテーマ、率直に言って、研究費の取れるテーマを取り込み解決をしてきました。集金活動は今後も大学教育を左右し、新たな解決策が必要になるに違い有りません。

14年間の教職生活の質は述べられ

ませんので数字をあけてみます。実質指導で博士を8名、修士を28名、学士51名を世に出しましたが博士が少なく残念でした。学術論文を国際誌に45報出版し、科研費A、B、受託研究、学内外研究費など総計約3億円を集め、県、市等の委員も長く勤めました。まだ14報ほどを出版予定で、IFの小さい物ですが、少しは義務を果たせたと思っています。大型予算での胎内市有機資源リサイクル実験センターの設立は苦勞の連続でしたが、今では楽しい活動として心に残ります。活動は私だけでした物ではありませんが、多額の金を用いた全活動の質を問われれば、全体としては忸怩たるものが前面に出ています。研究教育活動にもつと時間をを用いその質を高めたかったというのが偽らない感想です。

将来の日本を考えると大学活動には改革が必須です。労働人口の急激な減少と長く続く時代閉塞とを解決する人材の養成が急務です。明治維新後140年間堅持してきた価値観ではない、新しい社会の構築に必要な新しいパラダイムを創り担う人材が求められています。一挙に変換を成し遂げるのは困難ですが、百家争

鳴の中で解を求め実践すれば目を見張る前進が得られるでしょう。人類の未来に必要な高等教育を行う本来の大学が新大の中に出来る事を切に希望しています。農学部と大学院が益々存在感を増し、学生と共に新しい日本創造の為に活躍される事を願っています。私もこれからも社会的な活動をしていく所存で、この拙文は皆さんと共に違う場所と分野で現役を続ける私の決意表明でもあります。最後になりましたが農学部同窓会が益々発展する事を祈念し筆を置かせて戴きます。



支部だより

◆北海道支部

本年度で14回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会の総会は、10月22日（土）に、きのこの産地で有名な上川管内愛別町にある「協和温泉」で開催致しました。

ここは山すそにある一軒だけの静かな温泉宿で、出席は8名でした。

さて当日夕方、炭酸水が源泉である温泉を堪能した後、午後5時30分から総会を開催しました。

成田会長の挨拶の後、五十嵐が平成22年経過報告・会計報告、平成23年度事業・予算案を協議し、それぞれ承認されました。

坂本会員から同窓会常任幹事会報告について報告がありました。



本年度は役員改選の年で、全員が留任となりました。総会に続く宴会では、この宿の名物である「きのこのフルコース」を味わい

ながら近況報告などを語り合いました。

その後、部屋での2次会となりましたが、今回初参加の河原田さん（H21卒）を中心に、なごやかなひとときを過ごしました。

今回も、石塚副会長から提供のあった広尾産の「海の幸」を手に、それぞれ帰途につきました。

次回の総会は十勝方面で開催の予定です。

五十嵐 龍夫（昭51農）

◆富山支部

富山県支部は、平成22年7月16日（金）、農学部生産環境科学科の紙谷智彦先生をお招きし、42名の会員が出席して、平成22年度支部総会・懇親会が盛大に開催されました。

総会では、中山支部長のあいさつの後、平成21年度活動報告・会計報告・平成22年度事業・予算案を協議し、それぞれ承認されました。

役員改選では、平成20年度から富山県支部長を務めていただいた中山敏明（S39卒）氏が退任され、林靖太（S42卒）氏にバトンタッチされました。中山前支部長には支部活動に多大な貢献をいただき、会員一同心より御礼申し上げます。今後とも支部顧問として指導、助言をいただきたいと存じます。

総会の後、紙谷先生から新大正門



の位置が変わったことなど、大学の近況や農学部への動向についてお話をいただきました。先生が紹介される懐かしい新大の映像を見て出席者は一様に大学時代へタイムスリップしていました。

懇親会では、3年ぶりに新入会員の小林孝臣（H21生環卒）君の出席があったこともあり、新社会人としての抱負を語っていたりなど、例年にも増して大いに盛り上がりました。また、紙谷先生が富山市出身の同窓生ということで新潟の銘酒「べ張鶴」を頂戴し、出席者同士酒を酌み交わしながら旧交を温め、河渡や五十嵐キャンパスで学生時代の思い出を語り合うなど、つかの間の学生気分になりました。

今回、唯一心残りだったのは、例年、会の締めには全員で肩組み歌っていた農学部学生歌の合唱ができなかったことです。これまで、総会に参加していた、だいていた年配の会員

の方々が年々参加していただけなくなる一方で、若い世代は学生時代に学生歌を歌う機会がなく、その存在すら知らない状態です。事務局としては、この状態に危機感を感じ、これまで受け継いできた農学部学生歌をこれからも歌い続けられるよう、支部総会・懇親会を通じて会員への普及・啓発に取り組んでまいりたいと考えています。今後も富山県在住の会員各位が大勢参加していただけるよう活動を盛り上げてまいりますのでよろしく願います。

橋本 正義（昭55農工）

◆首都圏支部

首都圏同窓会は、6月4日（金）に「ホテル銀座ラフィナート」で総会を開催し、全学首都圏同窓会の納涼パーティーや総会に参加すると共に、新潟大学東京事務所の講演会等に参加をするなどの活動を行いました。

農学部の総会は、数年ぶりに平日に行い、同窓生・講演者及び来賓を含めて35名が集まりました。昨年よりも若干増えました。昭和28年卒の大先輩から平成二桁世代の若者まで幅広い年齢層が集まり、世代を超えて交流できたことが今年の特筆です。平成世代の9名が出席をしてくれたので、大幅に若返りました。講演は、新潟大学大学院自然科学研究科教授で副学長でもある紙谷智彦先



生から、「自然の攪乱と安定のサイクル」が育む多様な生物」の演題でお話をし、頂きました。新潟における生物多様性を復元する実践的な講演だったと思います。会長・来賓の挨拶、総会・会務報告、記念撮影を行った後、懇親会に移りました。初めて参加する若手に自己紹介をしてもらい、大学時代の話や近況などを語らいながら、楽しい一時を過ごしました。最後に全員で「四季の新潟」を歌って会を終りました。

◆ 福井支部

佐藤 純一（昭47農化）

福井支部の本年度福井松涛会総会開催に先立ち、去る5月29日チサンホテル新潟で開催された新潟大学農学部同窓会2010年度常任幹事会出席者橋本、明間、事務局、仲谷、佐々木一恵の四名で議事内容の報告会を行い今後の福井支部の活動計画について意見を交換しました。

福井支部も会員は50名を超えて昨年の総会及び懇親会には約半数が出席し、福井県の農業部門では広い職域での活躍にパワーを感じました。今までは年一回の総会だけでしたがもっと交流の場を増やし同窓生相互の親睦を深め

あつて新潟大学の発展に寄与出来ないかについても見交換をしました。

そこで提案されたのが、福井県で開催される研修会ら、配信を致します。会員間の情報交換を目指しています。来年は、農学部が全学首都圏同窓会総会の幹事学部です。皆様のご協力をお願いすると共に、多数の方の出席をお願い致します。



等に参加される新潟大学の先生方との交流・同窓会での新潟大学の先生方を講師にお願いして講演会や勉強会を催す等です。

平成22年度福井松涛会総会は11月26日例年と同じ福井市中央「庄屋」において開催しました。昭和29年卒の多比良樹徳氏を筆頭に半世紀にわたる会員が14名出席されました。

佐々木一恵事務局長の司会で議事進行が進められ22年度の収支報告・福井支部の今後の活動計画の承認等満場の拍手をもって承認されました。続いて出席者全員の記念撮影、さらに懇親会へと移りました。少々お酒が入ったところで各自自己紹介を兼ね近況報告をした後、先輩・後輩が二人、三人車座になって杯の交換をしたり、河渡の学生時代・五十嵐のキャンパスでのお互いの若き日や恩師を語り合ったりしました。

最後に新潟大学農学部学生歌を合唱し、来年の事務局長に朝日泰造氏をお願いし明間基生氏には引続き事務局をお願いしました。二時間半に及んだ懇親会も前々会長の青木源久氏の一本締めで散会しました。

橋本 孝一（昭45農工）

◆ 福島支部

十一月の吾妻の連山には白雪が輝き、稜線を辿れば安達太良の真白な山脈へと連なっています。

今では遠い日の出来事となった県

立福島女子高校の前任校である県立安達高校での思い出が浮びます。



今頃のある日、担任のクラスのみならずと二本松市展望台に登り、高村光太郎『智恵子抄』『樹下の二人』を誦じたことが蘇がえってきました。

あれが阿多羅山、あの光るのが阿武隈川。かうやつて言葉すくなな座つてゐると、うつとりねむるやうな頭の中に、ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。この大きな冬のはじめの野山の中に、あなたと二人静かに燃えて手を組んでゐるよろこびを、下を見てゐるあの白い雲にかくすのは止ませう。

時々開かれたクラス会では担任として「ここはあなたの生れたふるさと、安達高校です」と。その中の一人からの便りに「百歳まで長生きしてください」とあった。すばらしい教え子たちに恵まれた高校教師五十年間に想いを馳せるのです。

去る七月十七日、福島県同窓会が郡山市・ホテルプリシード郡山で開催されました。

会長あいさつとして、常任幹事会での進藤隆会長挨拶にあった内容を

報告しました。

農学部創立60周年にむけて五十嵐校舎改築中。卒業生就職状況100%。「嵐丘庭」改修中。新潟県支部の設立など。

次いで沢田吉男事務局長からの近況報告が行われ、その後、懇親会へと続きました。

学生時代の懐かしいエピソードなど若き日の昔話に花が咲き、福島県政に至っては例えば福島空港の開発事業には新潟大学のメンバーが深く関わり、中でも今回の先輩、後輩の繋がりが大きな事業発展に結びついたので知りました。二次会、三次会と心ゆくまで歓談の輪が広げられ、次回もまた集う人々への想いを胸に、支部活動の一層の高まりを祈念しながら、福島支部総会を閉会いたしました。

高久 英昭（昭32農）

◆秋田支部

平成22年猛暑の反動のためか今冬の寒波は全国的に厳しく、秋田では大雪のため農業施設などに被害が生じています。また、今シーズンも新型インフルエンザやノロウイルス等による感染性胃腸炎が流行し、事務局の某は健康管理のため正しい手洗いの徹底と飲酒の機会の調整を心がけているところです。

さて、平成22年度の秋田支部活動ですが、去る6月19日秋田キヤッス



ルホテルで総会を開催しました。総会後の懇親会では、県立大学の岩野君夫先生から新政酒造との産学共同開発限定酒「究（きわむ）」のご披露がありました。日本酒が苦手な会員の方でも、このお酒だけはグイグイいけていました。今般、ご当地開発食品が盛りですが、この時間と手間暇をかけた「究」は、酒処秋田においても大変お勧めです。

12月5日には忘年会を行いました。今回は近藤正先生と藤晋一先生よりご講話を頂きました。近藤先生からは「なぜ秋田でドジョウの繁殖？」と題し、地域協同型マドジョウ養殖技術体系の確立と産地化についてのお話でした。積雪低湿田の新たな戦略作目としての取り組みの裏話もあり、研究の労苦について深く感銘したところです。また、藤先生からは「韓国食のレポート」と題し、

当支部の会員が平成22年7月、きりたんぼなど秋田の名産品を提供する飲食店「AKITA」を韓国に開店し、第2の人生を華々しくスタートした様子の取材報告がありました。手軽に飲

みに行けない距離ですが、支部としても活躍を応援していきたいと思えます。韓国へ行かれる方はお店の情報提供をお願いしますのでお知らせください。

秋田支部では、昨年に引き続き本年度も2名の新入会員があり、支部活動の活性化が益々期待されます。今後は皆さんからの要望を反映させた行事にも取り組み、同支部の絆を深めていきたいと思っています。

生駒 隆一（昭61農化）

◆長野県支部

長野県支部は、1997年8月23日に、第1回の同窓会を開催し、以後、毎年1回開催してきました。過去の参加者数は、18名が最高でしたが、近年はやや少な目で、特に卒業直後の同窓生の参加が無く、やや寂しい状況が続いております。「参加したくなる同窓会」を目指し、開催時期や開催会場を変えるなどの工夫を始めました。

今年（2010年）は、長野県の中央に位置する松本市に会場を移し、9月11日、第14回の同窓会を、13人の参加者を得て開催しました。諏訪湖以南の南信地域に居住するお二人が、今回初めての参加となりました。このうちお一人は、女性としては本支部初の参加者でした。工夫すれば、何らかの反応があることが分かりました。次年度以降も、参加



者数を増やす工夫が引き続き必要であり、いろいろと考えて参りたいと思っています。

今年と同窓会では、イデガワ歯科医院院長、木下二

郎氏（13回—1965—農）に、「心のふるさと」と題してご講演いただきました。新大卒業直後に渡られたアルゼンチンの、気候・風土、人々の様子、生活のありようなどを、写真を見せて、分かり易くお話いただきました。この後、参加者一同で、近況報告や、直近の政治経済情勢、在学当時の思い出話などを語らい、交流を深めました。

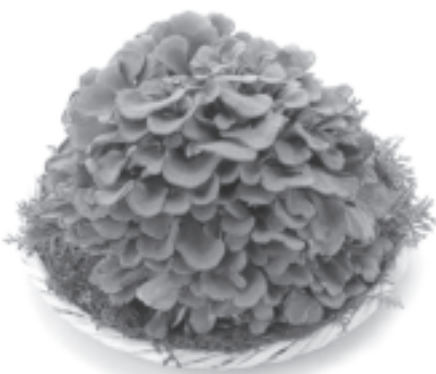
卒業後間もない同窓生の皆様にあつては、慣れない職場でエネルギーを使い、大変な時期でありましようが、同窓生という繋がりは大きな財産でもあります。大切にお考えいただければ幸いです。会場や開催時期の工夫に加え、今後は、何か目玉になる企画を開催するなど、「参加したくなる同窓会」を目指し、引き続き努力して参りたいと考えております。

小松 正孝（昭55農化）

株式会社 雪国まいたけ

「沿革」

昭和58年7月株式会社雪国まい
たけを設立し、まいたけの人工栽培



培に成功し、工場での大量生産技術を確立しました。その後、まいたけの生産量の拡大を図る一方で、平成2年4月にもやしの生産販売を開始、平成8年3月に加工品販売事業部（現、加工食品部）を開設、平成8年5月にまいたけ水煮の自社生産を開始、平成12年3月には東京証券取引所市場第二部へ上場しています。さらに、平成14年3月ぶなしめじの生産開始、同年5月えりんぎの生産を開始し、平成21年11月にはカット野菜の製造販売を開始し、現在に至っています。

当社の主力製品であるまいたけは、サルノコシカケ科のきのこで、かつては幻の茸と呼ばれ珍重されていました。人工栽培の研究は、昭和30年頃から試験研究機関や種菌メーカーによって行われてきました。しかし人工栽培による量産管理技術は難しく、現在において

も企業化されたものは数少ない状態です。当社は独自の管理ノウハウを開発し、温度、湿度、光、風、CO₂濃度などの環境を整えることで、菌床栽培による工場での大量栽培技術を確立しました。

雪国まいたけの始まりは32年前

の「もやし」栽培にさかのぼりま
す。自然な「もやし」づくりにか
だわったゆえに「色が悪い」と売
れなかった挫折をバネに「安全が
第一」、そんな時代が必ずくると
チャレンジを続けてきました。「お
いしさ」だけで満足せず、厳しい
鮮度管理基準に基づいた「新鮮な
食品」、そして「安全」も「安心」
も確実に提供すること。「自分が口
にしたくないものは、つくらない、
出荷しない」この理念のもとに
日々製品をお届けしています。そ
の証明として、平成9年に残留農
薬、重金属、衛生検査（微生物検
査）をはじめとした各種検査を行
う専門部署を設置し、検査結果を
毎日一般公開しています。現在、
当社で開発した残留農薬検査の分
析技術では310種類の農薬の一
斉検査が可能です。また、当社の
残留農薬検査の検査基準は、食品
衛生法で定めた基準値よりもはる
かに厳しい基準値で運用していま

「循環型農業団地構想」

—きのこ総合企業から総合食品企業へ—

平成21年に発表されたこの構想は、かつて不可能と言われたキノコの企業化を成功させたノウハウを生かし、国内農業の効率化と食の安全と価格の安定に取り組むのです。

1、食料自給率の向上

2、国際競争率の向上

3、農業従事者の所得向上と生活安定

4、排気・廃棄物ゼロで環境負荷低減

5、カット野菜、調理食品全体での供給

排気・廃棄物をすべて有価物とし、コストを劇的に抑えるまさに『農業革命』と呼べるこのビジョンを掲げ、当社は今後も挑戦していきます。詳しくは当社HP

(<http://www.maitake.co.jp/>) きのこJ

覧ください。

現在、約950名の社員中、新潟大学農学部出身者は2名在籍しています。研究開発室でまいたけ抽出物の薬理効果の研究に従事し、まいたけ生産の現場では生産管理を担っています。

【特集】猛暑、温暖化、その影響と対策

高温に強い稲の開発

応用生物化学科 三ツ井研究室

〈ブローグ〉

昨年夏が、酷暑・猛暑となったこともあり、今回の特集は、地球温暖化対策に取り組む農学部先生方の研究（研究室）を取り上げました。昨年11月大学院の研究棟に、三ツ井教授を訪ねて、「高温に強い稲の開発」に取り組む研究について、お話を伺ってきました。先生は、とても穏やかな笑顔で迎えてくれ、その年に海外インターンシッププログラムで行かれたマレーシアみやげのエキゾチックなコーヒーを傍らに、ていねいに研究の内容について、お話ししてくれました。



先生の研究室は、昔風によえば、農芸化

学科生化学研究室で、伊賀上先生や早川先生の研究室です。学生は、博士課程4人、修士課程6人、4年生3人、3年生4人、さらにスタッフとして特任助教2人、総勢20人の大所帯で、研究以外にも花見、イチゴ狩り、稲刈り、誕生会等多彩の催しなど、楽しくチームワークのよい研究室です。

〈稲の高温登熟障害のメカニズム〉

研究の内容について、ご紹介しましょう。昨年の酷暑・猛暑により、お米のデンプンが完全に蓄積できず「白未熟粒」（背白粒、乳白粒など）が多く発生したことにより、全国的に米の品質が大きく低下し、米どころ新潟県でも一等級比率が2割程度となりました。先生は、これまでイネデンプン代謝制御に興味を持って、分子生物学・細胞生物学的研究を積み重ねてこられ、応用研究として高温に強い稲の研究に着手されています。

研究の目的は、①高温登熟性優良品種の遺伝子発現特性の解析から、②高温登熟で生じる「白未熟粒」発生分子メカニズムを明らかにし、③高温ストレス耐性に関連する遺伝子並びに高温登熟による品質低下に

関わる遺伝子を同定、単離する。得られた研究成果を基に④高温登熟性に優れたコシヒカリ系統を開発するというものです。

これまでの研究では、高温登熟性に優れる品種「ゆきん子舞」と品質が大きく低下する品種「トドロキワセ」との比較から、高温ストレスによりデンプン集積抑制酵素遺伝子（例えばα-アミラーゼ遺伝子）が異常に強く発現することによって米の品質が低下すること。高温登熟性に優れる品種において恒常的に高い発現が見られるSOD（スーパーオキシドジムターゼ）を強発現させたイ

海岸林の生物変化と温暖化の影響

大学院自然科学研究科（農学部生産環境科学科）

准教授 中田 誠



地球温暖化という、どこか遠い世界の出来事のように思っている人が多いのですが、私たちの身近なところにも、その影響が少しずつ及び寄っているようです。私の研究室が行っている最近の研究成果から、新潟市の海岸林で見られる温暖化の影響と、私たちが取り組むべき課題について紹介したいと思います。

新潟市中央区の西海岸公園では、人工的に造成されたクロマツ林にさまざまな広葉樹、とくに常緑広葉樹が多く自然侵入しています。これま

ネでは高温登熟性が改善されることを解明しています。

さらに、高温登熟性に優れたコシヒカリの体細胞変異系統を見いだしています。これらの系統については、新潟県、鹿児島県、福岡県の試験場の協力を得て、新品種を誕生させるべく研究が継続されています。

先生曰く、「高温障害発生メカニズムは、そんなに簡単ではない」とのことです。地球温暖化が進行する中で、昨夏のような異常気象に遭遇しても高品質の米が消費者に届くよう、三ツ井研究室のさらなる発展を期待しています。（編集委員HW）

で25種類の常緑広葉樹を確認していますが、そのうち約3分の2が本来は新潟県に天然分布していなかった暖地性樹種です。これらは、近くの民家の庭木が実を着け、それを野鳥が食べて、糞とともに種子をクロマツ林内に落としていったものが起源です。ここで注目しているのは、このような暖地性樹種が、野外で生長と繁殖を繰り返すことが可能になっていることです。新潟地方気象台の観測データでは、新潟市の年平均気温はこの100年間で約1・5℃上昇しましたが、とくに最近30年間は約1℃の上昇になっています。これには都市化の影響（ヒート

海岸林の中に出現した「シコロ」林



アイランド現象が少しは関係しているようですが、地球温暖化が背景にあるものと考えられます。

西海岸公園には「野鳥の森」と呼ばれる区画があります。地元の

野鳥の会の人たちが20年以上前から標識調査を行っており、これに私の研究室も協力しています。ここでの渡り鳥の到着日を解析したところ、新潟海岸林への渡来が年々早まっている種類の多いことや、春の気温が高い年ほど多くの渡り鳥の渡来日が早くなっていることがわかりました。また、海岸林に生息する昆虫にも、これまで新潟県に生息していなかった暖地性昆虫で、常緑広葉樹林に密接に結びついて生活している種類が見つかりました。

一方、クロマツ林から常緑広葉樹を交えた針広混交林への急速な遷移進行には、人間の側の管理の問題（海岸林の手入れ不足）も関係しています。その一方で、マツノザイセンチュウによるマツ枯れが新潟市周辺ではいまだに発生しています。冬季の強風による砂や潮の被害から私たちの生活を守るために海岸砂防林はなくてはならないものです。クロマツ林に自然侵入した常緑広葉樹には、海岸の環境に適応している種類が多く

含まれており、将来の温暖化によって生長が促進されるとともに、分布域がさらに拡大することが予想されます。そこで、このような常緑広葉樹を積極的に活用し、クロマツとともに針広混交の複層林へ誘導する研究を進めています。温暖化の影響を受けるばかりでなく、むしろそれを

特集 「農学部附属の農場・演習林」を訪ねて

今回の松涛では、同窓生のみならず、学生時代に、額に汗し、植物や動物そして土と出会った農場・演習林の現在の状況について、編集委員がレポートします。

現在、農場・演習林は、「フィールド科学研究センター」に一元化されていますが、農場は、村松（現在は五泉市）及び新潟、演習林は、佐渡にあることは以前と同じです。

新潟農場 新潟ステーション 新潟市西区新通

プロフィール

新潟市西区新通にある新通農場は、周囲に、大きな病院や少し離れたにはありますが大型商業施設（スーパー等）が建設され、私が通った昭和50年代の風景とは、大きく変わりました。

新通農場を訪問したのは、昨年11

利用して次世代の海岸砂防林を育成する適応策が重要と考えています。幸いにも、西海岸公園では新潟市・中央区役所の理解と地元NPO法人の協力を得ることができ、温暖化を活かした海岸林の整備作業を進めています。

月中旬の夕方暗くなつてからでした。大阪府職員から、2年前に赴任された岩本准教授が暖かく迎えてくださり、農場の現状について、熱く語ってくれました。

〈農場の概要〉

農場の体制は、岩本准教授と二人の技官（佐藤さん、高橋さん）が担っています。

農場の規模は、水田2・2ha及び転換畑0・6ha、大型ハウス1棟、パイプハウス2棟それに作業棟及びプレハブ棟があります。

作物としては、砂丘地である五十嵐キャンパスと異なり、水田であることを活かして、稲及び多様な転作野菜（ソラマメ、エダマメ、タマネギ、サトイモ、ナス、トマト、ハクサイなど）や草花・ハーブの苗などが栽培され、主に学内で販売され、喜ばれています。

〈教育面での農場〉

教育面での活用は、学生の実習の

場として、農学部だけでなく、教育学部、大学院の力も活用され、年間延べ約800人が学んでいます。主なものは、

農学部1年生の「栽培学汎論」、2年生の「基礎農林学実習」、3年生の「植物生産学実験実習」、教育学部中学校技術課程の栽培および実習、そして大学院G.P.（組織的な大学院教育改革推進プログラム）の実習などが行われています。昔懐かしい2年生の実習は、毎週水曜日の3、4限で、農場までは、以前と異なり、新しい農学部のバスの送迎があります。

また、大学院G.P.では、「食づくり実践型『農』と『食』のスペシャリスト養成プログラム」として、酒米の播種から収穫、さらには地元の酒造会社の協力を得て、新酒づくりまでを実践し「新雪物語」のネーミングで販売しています。

〈研究面での農場〉

研究面では、年間延べ約2、800人が学んでいます。主なものとして、水稲では、耐暑性、酒米の育種や栽培試験、園芸では、ユリやナスの育種、旧山古志村等の伝統野菜である「かぐらなんばん」の系統の特性把握、イチゴの高設栽培、さらに



新通 稲刈り

は、トキのエサ場やコンポスト関係など、狭いほ場を駆使して多様な研究が行われています。

昔に比べ、研究に多くの先生方や学生が使うようになり、ほ場の調整に苦労しているとのこと。学生の中で農業経験のあるのは1割程度とのことですが、昨年夏の猛暑の中でも、意欲的に農場に通い、研究に取り組む姿が見られました。

岩本先生に農場の課題をお伺いしたところ、手狭であること、そして、実習するだけの最低限の設備で、教育面や地域との交流ができるような施設整備が必要とのことでした。トイレもようやく昨秋、男女別になり、水洗化されたところです。

「農」の持つ力を活かした多様な教育や研究、地元との交流の場としての新通農場の発展を期待しています。（編集委員HW）

村松農場

村松ステーション
五泉市石曽根

○フィールド科学教育研究センター村松ステーションに行ってきた！

私にとって十何年振りの村松農場、建物は変わっていないようにでしたが、果樹園が……ない。高橋能彦先生と吉田智佳子先生にお話を聞きました。

―現在の農場の規模は？

畑が15haで、半分が牧草地です。乳牛は、成牛が16頭、育成が7頭。畑の残り半分は大豆、大根、ネギ、

枝豆、ジャガイモ、サツマイモ、トマトなどを栽培しています。農場の管理は7人（非常勤・パートも含めて）で行っています。昔ながらに宿直・日直もあります。

1日2回の搾乳が大変なので、独法化してから酪農をやめた大学もありますが、本学は継続して取り組んでいます。農場収入の半分は、牛乳の出荷によるものです。ほかに、農産物を構内で直売したり、病院や学校にも販売しています。（お邪魔したとき農場の玄関でジャガイモやサツマイモ、大根を売っていました。）

―独法化して何か変わりましたか？

近隣の親子を招いて実習したり、新潟市西区と連携して牛の世話やジャガイモを栽培するなど社会連携活動も積極的に行うようになりました。対外的な姿勢が強くなりました。毎年8月はじめに農場開放をやった

り、酪農教育ファームの認定を受け、ほかの農場とも交流を行っています。また、地元の愛宕中学校と連携した授業では、月1〜2回のペースで、年間を通じて生産から加工の実習を行っていて、昨年はその卒業生の中から農学部に進学する生徒も出ました。将来的には農産物の加工・販売などにも手を広げていきたいと思っています。

―学生実習は昔ながらですか？

学部2年次に基礎農林学実習として、120人を4班に分け、2泊3日の農場実習を行っています。講義に影響するからと、時期は9月の夏休み期間中なんです。

―僕らの頃みたいに、毎週水曜と夏

休み前の合宿はないんですね。

水曜日には、新通ステーションで実習を行っています。ほかに森林生産学も1〜2回日帰りで行いますし、畜産関係はやはり9月に牧場実習をやっています。

―農場での最近の研究テーマは？

乳用牛の繁殖成績向上や資源循環型酪農に向けた研究に取り組んでいます。土壌肥料学を専攻するマスターも3人います。

※マスターは高橋先生の学生で、畜産の専門ではマスターはおりません。

―最近の学生気質はいかがでしょう？

最近就職状況が厳しいせい、か、実習にもすごく真剣で、どんな仕事があるのかと聞いてくる学生もいます。4年生のスタートは就活ばかりで、研究に取り組みにくい状況になっています。

―卒業されたみなさんに何かお伝えしたいことは？

畜産部門では、県のクリーンミルク生産農場の認定を受け、安全・安心のブランド農場となりました。村松ステーションから出荷した牛乳はほかの酪農家さんの牛乳と一緒に、なつてパックになります。みなさん、是非牛乳を飲んでください。

最近農学部を受験してもらっため、県内の高校にパンフレットや募集案内を配っています。また、不況の影響を受けてか、県内出身者が増える傾向にあります。是非みなさんのご子弟にも農学部への受験・入学をお勧めいただきますよう、お願い

いたします。

また、村松ステーションは、研究や実習をやりながら農場を運営しています。そういう面での利用もできます。是非、遊びにきてください。

―ありがとうございます。先生方はお忙しくてなかなかつかまりませんが（メールは届きます）。みなさん、是非連絡を取って遊びに出かけください。（編集委員SF）

佐渡演習林

佐渡ステーション
佐渡市小田

○フィールド科学教育研究センター佐渡演習林は遠かった！

明日からは荒れるという1月の小雪のばらつく中、佐渡市小田にある演習林を訪問しました。さすが林業の研究センターだけあって執務室はログハウス。木のぬくもりが感じられる暖かな部屋の中で崎尾均先生から対応いただきました。

―こちらの積雪はどのくらいになりますか？

海岸部はほとんどありませんが、林道で3mくらい。深いところでは5〜6mになります。尾根沿いは風がすごく強いです。

―今、こちらではどのようなことをされているのですか？

500haの演習林があり、これらと林道の管理などを行っています。学生実習は主に6〜9月に行います。体制としては、教官が私と本間航介先生、非常勤も含む技術員が4名、また管理と食事の世話で1名の

配置となつています。宿泊施設は一度に40人くらい泊まれますが、年間1000日以上泊まり込む学生もいます。

―実習は主にどのよ

うなことをされていますか？

林道の設計や防災（治山）、育林（下刈りや間伐）、測量、森林環境、生育する植物の調査などを行っています。

―最近、天野尚さんの原生林の写真で有名になりましたよね。

2年前までは一般の方は入れていませんでした。最近のエコツアーブームもあってガイド同伴で一般にも公開するようになり、年間10〜20日間程度のガイド養成の研修なども行っています。

―最近の学生さんはどんな感じでしょうか？

私から見るとこぢんまりして見えますね。お酒を飲まないし、むしろ女子学生の方が元気です。でも、授業にはよく出てきて、学業の方は一生懸命やっています。今、就職が難しくなっていますが、半数くらいは大学院に進学し、そういう子たちは専門職に近い仕事にも就いています。

―研究面では、どのようなことに取り組んでいますか？



▲佐渡建物 佐渡実習▼



写真集で話題になった天然スギの更新（どう大きく育っていくか）や、溪畔林の植生調査、樹木の生活史、土石流後の植生回復、ナ

ラ枯れ後の森林回復、標高による森林植生の変化などの研究に取り組んでいます。

―佐渡演習林でこれからやっていきたいことは何ですか？

今後、演習林の外部利用を進めて行きます。文科省の共同利用拠点に申請し、他の大学や専門学校による演習林の共同利用を進め、施設の有効利用と環境関係の勉強の場に使っていきたいと考えています。そのための人材確保も進めています。

また、研究面では、森・川・海をつなぐ研究に取り組んでいきたい。佐渡はコンパクトなため、森の影響が海に出やすいところがありますので、今後のテーマとしていきたいと思っています。

―ありがとうございます。

天野さんの写真集で有名になった天然スギの原生林。今回は時期が悪くて行けませんでした。エコツアーがありますので、卒業生のみなさんも一度訪れてみてはいかがでしょう。（編集委員S.F）

ペンリレー

同窓生からのたより

子育て中です！

藤本秀樹（平4農）



前回執筆された横山先輩から、ペンリレーの依頼を受けました。横山先輩は大学では直接重なって

おりませんが、農村問題研究部の先輩として大学卒業後も親しくさせていただいております。農村問題研究部は大学の学友会組織で、名前の通り農村に向き農山村の問題について調査する活動を行っており、新潟県の東頸城郡（市町村合併により消滅）の松代町（現在は十日町市）に

フイリピンから集団お見合いで嫁ってきた女性たちについて調査し、農山村の抱える深刻な過疎化の問題、そこから派生する様々な社会問題について関心を持って調査していました。

現在は、出身地の長野県で農業高校の教員をしております。学生時代は農業経営学研究室で学びましたが、現在勤務している高校では、味

噌、ジャム製造、ワイン醸造などの授業を中心に行っており、学生の時にもう少し幅広く勉強しておけばと後悔もします。

昨年3月に娘が産まれて、余りに可愛いので育児休暇を取得しました。妻は海外で仕事をしているので（頻繁に帰国してくれませんが）、1人で子供の面倒を見えています。公園デビューもできず、子育てについて相談できる人も周りにいないので、育児ノイローゼ気味にもなりました。自分の子供を持つて、今まで以上に地域や日本の将来、子供たちの教育について深く考えるようになりました。日本の社会はこのままで良いのか？子供たちの将来は大丈夫なのか？子供たちに取ってより良い教育とは？

私にできることは限られますが、一人の親として自分のできることを頑張ろうと考えています。脈略もなく書きましたが、これまで、学生時代の恩師、先輩、友人達のアドバイスに助けられていることを感謝しています。これからも新潟で学んだ「縁」を大切にしていきたいと考えています。

次回は新大ラグビー部で一緒だった五十嵐正博さん（農業工学科卒）にバトンを渡したいと思っています。顧問をしている高校のラグビー部

が、北信越大会で新潟に行った際に久しぶりに顔を合わせました。

地域住民と答えを求めて

原田 大輔 (平6農工)



① 近況報告

大学を卒業してはや17年が経ちました。地元の町役場に就職したというところで仕事内容は農業振興から始まり、学校教育、選挙管理委員会事務等、様々な業務を経験してきました。

現在は、産業課に勤務しており、農業後継者の育成や特産品の振興等の業務を担当していますが、第一次産業の現状はかなり厳しく、それを解決すべく地域にあつた施策が出せず頭を抱えてしまう毎日です。

そんな日々の業務の中で学んだことは、住民の方といかに多く接し、コミュニケーションを図ることの大切さです。直結した答えや解決は得られないことは多くありますが、少しでも前に進んでいかなければならないという気持ちになります。これからも地域の中に溶け込み、地域に根ざした役場職員となれるように日々奮闘していきたいです。

② 趣味または熱中していること

趣味は大学時代から始めたゴルフです。腕前はなかなか上達しません

が、老若男女問わず多くの人と知り合う機会を提供してくれるゴルフにはまっています。現在は、特産品の販売等で土日の出勤が多く回数は減ってきていますが、たまに行くゴルフは仕事を頑張った自分へのご褒美として1日のプレーを満喫します。

また、ゴルフというスポーツは奥が深く、スコアはその時の環境(自然・人)に大きく左右されます。最終的には全ては自己責任ということになり、1日4時間程度というプレーの中で何か自分の人生そのものを感じてしまう時があります。

③④ 最近感動したこと及び皆さんへお伝えしたいこと

私の住んでいる若狭町は鯖街道の宿場町(熊川宿)があり、古くから京の都と活発な行き来をしてきた地域ですが、近年は少子高齢化により限界集落と成りつつある集落が増えてきています。

そんな課題を解決する手段として、都会から若者を募集して2年間の農業研修を行い、その後、町に就農定住してもらう「就農定住研修事業」を実施しています。

この事業は9年目を迎え、27名の研修生のうち20名がこの若狭町に就農定住しています。地元の若者が自分の育った田舎に残りたいという気持ちが薄れてきている中で、体力とやる気、そして柔軟なアイデアをも併せもった都会の若者たちがこの町に新たな風を吹き込んでくれる姿には感動させられ感謝の気持ちでいっぱい입니다。

皆さんの周りにも新たな地で就農定住を考えている若い方がいましたらご連絡いただきたいと思っています。

⑤ 次回の執筆者の紹介

同級生の平木叙光さんを指名させていただきたいと思っています。彼は体も心も大きく、すべてを受け止めてくれる我々のドカベン的な存在でした。持ち前の明るさと面倒見の良さで我々だけでなく後輩からも信頼が厚かった人物です。

牛の歩みのように

明間 基生 (平6畜産)



思い起こせば十
六年前、行ったこ
ともない福井県の
採用試験を受けま
した。この土地に
特別な思い入れが

あつたわけではなく、親戚や友人さえ、誰一人住んでいませんでした。福井の暮らしに不満はありませんが、当時の自分に「お願いだから、もう少し考えて将来を決めようよ」と説教したい気持ちはあります。

県に入ってから、畜産試験場、農業改良普及センター、県営牧場に勤務し、今は県庁で行政に携わっています。公務員とはいえ、長年家畜と共に生きてきましたので、カレンダーどおりに休日が訪れる生活をとっても新鮮に感じています。また、今までが現場一辺倒でしたから、なかなか行政の思考に波長が合わず、反

省させられることの多い毎日です。福井に来た当初は、言葉の壁に苦労しました。「だんねえ」、「のくてえ」、「ほやほや」(順に「構わないよ」、「鈍くさい」、「そうだよ」)などなど次々と未知の言葉が襲ってきます。福井の人が笑顔で「お前は本当にのくてえ奴やなあ」と言ったら褒められていません。ご注意ください。

学生時代は、同じ内容を何度も(追試で)勉強させていただきました。考えていた以上に実社会で役立つことが多く、先生方には大変感謝しております。通用しなかったのは自分の青臭い方法論でした。農家の方とお話すると、ついついもつと新しい技術について簡単に語ってしまいます。そうしたら、ある農家さんに諭されました。「俺たちは第一に村での暮らしがあつて、その上で農業をやっているんだよ。暮らしが一番大事。良い技術が最善とは限らないんだよ」。

少し落ち込む経験を、何度も繰り返して、これからは私のペースで成長していくでしょう。愛する牛たちの歩みのように。



第16回農学部フォーラムの開催

第16回農学部フォーラム実行委員長

村上 拓彦

第16回農学部フォーラムを12月4日(土)に万代市民会館多目的ホールで開催しました。今回は「新潟平野を科学する―市民とともに考える地球環境問題―」というテーマで行いました。今回のフォーラムを企画するにあたり、外部講演者を呼ばずに全て生産環境科学科関連の教員だけで話題提供を行うという方針を立てました。生産環境科学科にはフィールド科学、自然との共生という大きなキーワードがありますが、

内容をひとつでも多くの市民の方々に伝えたいと考えました。参加者は130名を超え、その中には高校生も含まれておりました。今回、高校生にもフォーラムに参加してほしいと考え、新潟県下の高校に宣伝を行いました。その成果はありました。



パネルディスカッションの様子

学科内の多くの教員が新潟平野と密接に関わりながら種々の研究活動を展開しております。フォーラムを通して興味深い内

科)に、地球温暖化編として「新潟市

の海岸林における樹木・野鳥・昆虫の相互関係と温暖化の影響(中田准教授・生産環境科学科)、「田んぼで洪水は防げるか―「田んぼダム」の可能性と技術的課題(吉川助教・災害復興科学センター)」がありました。なお、篠田市長が公務多忙中に関わらず会場に駆け付けていただき、ご挨拶をいただくことができました。

それぞれ興味深い話題提供の後、有田博之教授のコーディネートでパネルディスカッションを行いました。最初は参加者から寄せられた質問に答えるかたちで始まり、その後

会場から直接質問を受けるようにしました。そして、予定時間であった16時にフォーラムを閉会しました。参加者からのアンケートには「パネルディスカッションの時間をもっととるべきだった」とのご意見が数多くありましたが、これはそれだけ参加者に興味深い内容だったという確かな証拠であり、我々の予想をはるかに超える反応であったかと思えます。今後も地域に根ざしたかたちでさまざまな研究活動を展開し、今回のようなかたちで市民の皆様にご成果を還元していきたいと考えております。

第二回世界農学部学生シンポジウム派遣報告

農業生産科学科 二年

近藤 孝之

この度、プトラマレーシア大学(以下、UPM)を訪問する機会を与えて頂き、ありがとうございました。参加に至る準備と現地での経験から多くの事を学びました。なかでも私が一番感じたことは英語運用能力の違いです。参加者はもちろんのこと、

UPMの学生はコミュニケーションの手段として英語を十分に使いこなしていました。UPMでは多くの授業が英語で行われるため、英語力が必要不可欠の環境にあることによります。国際社会を常に意識した成長著しい新興国の現状に感心しました。また、シンポジウムでは学生委員会が全ての運営を行っています。同委員会の規模は非常に大きく、U

P Mの学生がいかに周辺国と積極的に交流しようとしているかが良く理解できました。最後に、U P Mに滞在して感じたことは、新潟大学で国際社会を意識する機会が著しく少ないということです。もはや農業は他国との関わりなしに考えられない状況です。将来、広い視野を持った学生が社会で活躍するために、学生自身が行う国際的活動をより一層支援する組織的取組みが農学部が必要であるとともに、日々の講義等から国際的センスを涵養することが大切だと痛感しました。



生産環境科学科 四年

高橋 もなみ

私がマレーシアの国際シンポジウムに参加するきっかけとなったのは、同世代が就職活動をしているとき、自分は社会に出て本当に何をやりたいのかと考えたことです。多くの人に会って様々な意見を聞きたいという思いから、指導教員の勧めもあって参加することにしました。

国際シンポジウムは九力国から学生が集まり、十日間で口頭発表と現地見学が行われました。私は英語がほとんどできませんでしたが、参加した学生たちとはすぐに仲良くなりました。そのとき、他国の学生の学習意欲がとても高いと感じました。そして、行動しようともせずに、やりたいことが見つからないと言っていた自分に気付いたのです。

それからは、今後自分が何をしていきたいのかということを具体的に考えるようになりました。帰国後、機会があれば様々な場所を訪れて新しい人と出会い、経験を通して得られる情報を大切にしてきました。私は大学院の進学が決定しているので、自分の将来の夢をより具体的に

しながら、大学院生活を過ごしたいと考えています。

最後に、私は大学生活の中の常識はとても狭い世界の中での話であるということに多くの学生が気付いていないことが問題だと感じていました。新潟大学は留学生が少なく、外

就業力育成支援事業(就業力G P) 「インターシップ実質化による就業力の獲得」

箕 口 秀 夫

リーマンショック以来、大学卒業予定者の厳しい内定状況が大きな社会問題にもなっています。このような状況のなか農学部では「インターシップ実質化による就業力の獲得」の取組を平成22年度に文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」として申請、採択されました。

て配置し、学年進行とともに狙いを変えつつ、教室と現場を行き来する既存のシャトルカリキュラムを組み合わせ、現場体験や人的交流を通して、就業力をもった人材を育成します。

本取組は、インターシップの実質化による地域・社会・企業等と連携した「体系的な人材育成カリキュラム」の開発を目的としており、全学に普及することを前提とした農学部のパイロットモデルです。インターシップを、各学年に地域の教育力を活かしたサテライト実習とし

新潟大学農学部は、「食の安全安心」が強く求められる時代において、農業立県の田園型政令指定都市に立地する大学の農学部として、地域の農林業・食品産業の発展と環境の保全に手腕を発揮する人材を社会に送り出すことが強く期待されています。

そこで、現場経験に根ざした使命感を動機付けとし、積極的に地域社

会に貢献しようとする誠実さに裏打ちされた「農学分野における就業力」、すなわち「農力」を段階的に修得させます。農力は、基礎的な知識・思考力と現場に対応した技術的な応用力を一体化させ、必ずしも最適な解決策がみつからない課題に対して臆さず、進んで、地道に取り組んでいける能力ともいえるでしょう。

本取り組みでは、自治体、企業、NGOなど地域社会で活動する組織・人との協働教育体系である「キャリアアジム」を構築します。キャリアアジムでは、農学部8主専攻プログラムの学習・教育目標を達成するためのカリキュラムに加えてプログラムを横断する次の科目を配置します。また、本取組を実施するため全学教育・学生支援機構と協働し、農学部キャリアアジム運営センターを新たに設立します。

【初年次（学習の動機付けと問題意識の涵養）】

専門分野へのインセンティブとして「サテライト実習Ⅰ―見る・知る―」で、様々な農林業生産現場、工場、研究所等の現場を体験し、地域における農学の必要性和使命を意識させます。また、大学学習法「スタ

デイスキルズ」と各種「概論」等により専門分野への学習意欲を涵養します。

【2年次（必要な知識、技術の自律的学習）】

チームインターンシップである「サテライト実習Ⅱ―観る・考える―」で、課題探究のために必要な企画力、コミュニケーション能力を涵養する。実社会ではチームでの仕事が多くなり、その際のチームビルディング、チームワークおよびリーダーシップといったスキルが求められています。そこで、この実習Ⅱは学科枠を取り払ったグループがチームをつくり、学生同士の議論を通して現場を選ぶところから主体的に取り組み、チームで必要とされるスキルを育成するプログラムです。また、「基礎農林学実習」により農学が対象とする幅広い分野における問題解決に必要な基礎的、かつ普遍的な技術を学びます。

【3年次（現場における知識、技術の検証）】

高度な内容を含む専門応用の講義、実習・実験に対応させた「サテライト実習Ⅲ―観る・働く―」で、専門分野における知識、技術が実社

会でどのように活かされているのかといった農学との関わりを理解します。カリキュラム策定にあたっては、「インターンシップ先におけるプログラムのあり方」と「成績評価手法」を段階的に検証、発展させ、インターンシップの実質化を促進します。

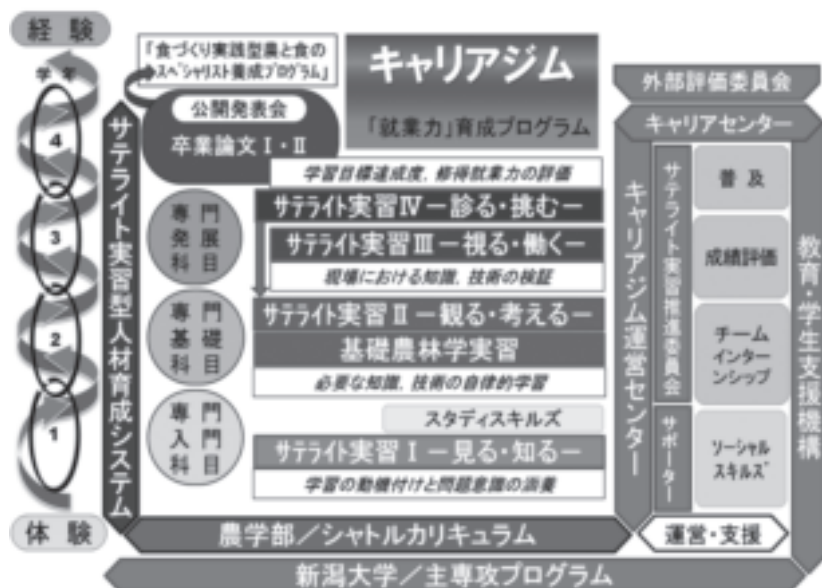
【3・4年次（学習目標達成度、修得就業力の評価）】

現場を活用した農カトリアルである「サテライト実習Ⅳ―診る・挑む―」で、学生自身による学習目標達成度の確認、修得就業力の評価、検証を行います。

トリアルでは各分野における地域のトップランナーをコーチとして訓練を行うスペシャリストコースと、地域や各種団体と協働して地域の課題に取り組み、その結果をワークショップなどで発表するファシリテーターコースの2コースの設定を考えています。これら、段階的に取り組むインターンシップを軸としたサテライト実習型人材育

成カリキュラムを経て、「卒業論文Ⅰ、Ⅱ」によって主専攻の最終学習目標を達成します。

最後になりましたが、同窓会会員の皆様には是非、本取組の「サポーター」としてご協力をお願いいたします。地域で活躍される同窓会会員の皆様のご支援が、本取組を実りあるものとするためには必要不可欠です。



2009年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告 (平成21年5月1日～平成22年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	3,400,000	3,400,000	0	
前年度繰越	1,525,873	1,525,873	0	
利子・雑収入	13,554	60,456	46,902	利息 834、雑入 39,622、祝儀 10,000 (幹事会)、祝儀 10,000 (卒業式)
合 計	4,939,427	4,986,329	46,902	

2. 支出の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
1. 事務局費	450,000	548,451	98,451	全学交流会参加補助、消耗品、通信費、大学60周年行事参加経費、謝金等
2. 会議費	400,000	424,857	24,857	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	105,000	45,000	名簿情報メンテナンス
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会経費補助
5. 退職者記念品費	90,000	70,822	▲ 19,178	定年退職者 (教員 4・職員 1)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	
7. 「松涛」発行費	1,850,000	1,972,138	122,138	「松涛」「しおり」印刷、発送
8. 慶弔費	30,000	9,722	▲ 20,278	弔電等
9. 支部活動助成費	245,000	245,000	0	7支部 (各支部35,000円)
10. 学文活動助成費	250,000	373,150	123,150	国際シンポ補助、招聘旅費(ロシア)
11. 全学同窓会負担金費	377,000	376,105	▲ 895	分担金
12. ホームページ費	30,000	31,500	1,500	コンテンツメンテナンス
13. 出前講義旅費助成費	450,000	105,822	▲ 344,178	教員による高校等への出前
14. 予備費	7,427	0	▲ 7,427	
合 計	4,939,427	4,962,567	23,140	

3. 差引残高 (A - B) 23,762円 次年度への繰越金

2010年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算 (平成22年5月1日～平成23年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	4,500,000	3,400,000	1,100,000	
前年度繰越	23,762	1,525,873	△ 1,502,111	
利子・雑収入	10,834	60,456	△ 49,622	利息 834、祝儀 10,000
合 計	4,534,596	4,986,329	△ 451,733	

2. 支出の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	548,451	△ 48,451	役員会・通信・電話料・謝金等
2. 会議費	450,000	424,857	25,143	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	105,000	△ 45,000	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	25,000	70,822	△ 45,822	定年退職者 (教員 1)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	農学部改修工事中のため
7. 「松涛」発行費	1,500,000	1,972,138	△ 472,138	「松涛」印刷・発送等、文字拡大、4ページ増
8. 慶弔費	30,000	9,722	20,278	弔電代等
9. 支部活動助成費	350,000	245,000	105,000	支部活動助成(7支部@35,000 + α)
10. 学文活動助成費	200,000	373,150	△ 173,150	農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	377,000	376,105	895	分担金
12. ホームページ費	100,000	31,500	68,500	HPメンテナンス等経費
13. 出前講義旅費助成費	210,000	105,822	104,178	70,000円×3学科
14. 予備費	32,596	0	32,596	
合 計	4,534,596	4,962,567	△ 427,971	

2009年度新潟大学農学部同窓会基金会計報告

1. 収入の部 (円)

科 目	金 額	備 考
繰越金	52,514,812	
基金収入 (入会金)	4,717,420	@30,000円×159名 - 振替手数料
利子	134,440	
名簿会計廃止による繰入	371,295	
合 計	57,737,967	

2. 支出の部 (円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	3,400,000	
合 計	3,400,000	

3. 次年度への繰越金 (円)

科 目	金 額
収入合計	57,737,967
支出合計	3,400,000
繰 越 金	54,337,967

データでみる最近5年間の就職事情

農学部就職専門委員 箕口秀夫

大学卒業予定者の厳しい内定状況が大きな社会問題となつていきます。農学部では就職専門委員会を中心に全学の教育・学生支援機構キャリアセンターと連携をとりながら様々な週初支援活動を行っております。その結果、

皆様のご協力もあり、ここ5年ではほぼ100%と全国トップクラスの就職率を維持しております。データでみる過去5年間の就職事情をお示しますので、引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

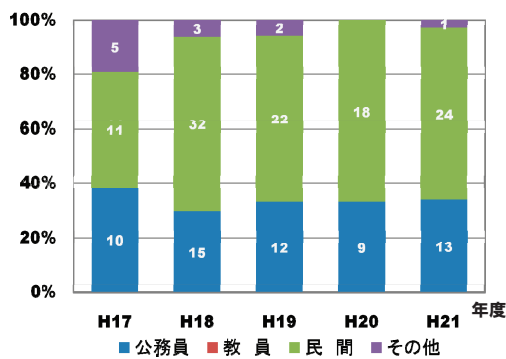


図-5 過去5カ年の生産環境科学科卒業生就職先の推移

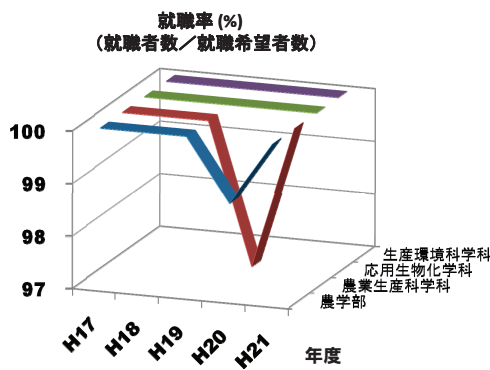


図-1 過去5カ年の農学部、各学科就職率の推移

過去5カ年の主な就職先（農業生産科学科）

【公務員】

- 新潟県(2), 山形県

【民間】

- アーランドサカモト(株)
- 岩塚製菓(株)
- 越後製菓(株)
- カネコ種苗(株)
- (株)きむら食品
- (株)コメリ
- (株)サイゼリア
- 自営業(農業)
- (社)日本食肉格付協会
- 全農群馬
- 全農長野
- 新潟県信用農協連合会
- 山崎製パン(株)

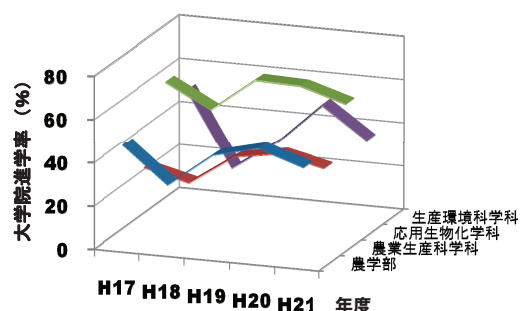


図-2 過去5カ年の農学部、各学科進学率の推移

過去5カ年の主な就職先（応用生物化学科）

【公務員】

- 福島県
- H21:小千谷・高崎・新潟・白山市役所

【民間】

- 越後製菓(株)
- (株)きむら食品
- (株)タケシヨウ
- (株)堀川
- (財)日本食品分析センター
- 伏見蒲鉾(株)

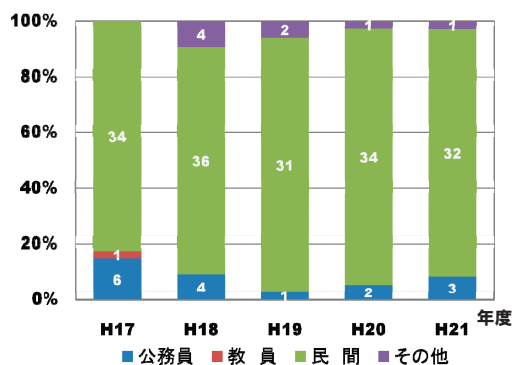


図-3 過去5カ年の農業生産科学科卒業生就職先の推移

過去5カ年の主な就職先（生産環境科学科）

【公務員】

- 北陸農政局, 林野庁
- 新潟県(13), 茨城県, 山形県
- 富山県, 長野県, 福井県, 福島県
- 新潟市, 上越市

【民間】

- (株)カヤノ
- (株)建設技術研究所
- 亀田製菓(株)
- 自営業(農業)
- ダイエープロビス(株)

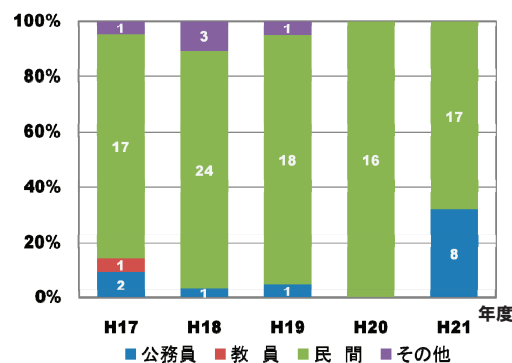


図-4 過去5カ年の応用生物化学科卒業生就職先の推移

学部だより

治部田先生を偲んで

伊藤 忠雄（昭42農）

治部田幸範先生（新潟大学名誉教授、農業経営学）におかれては、10月22日、かねて療養中の新潟市内の病院で逝去されました。享年85才でした。

先生は因幡の人で、京都帝国大学農学部をご卒業後、母校の講師を経て昭和28年9月に本学農学部に着任され、以来、助教授、教授を歴任され平成3年3月に定年退職されるまで38年間を本学発展にご尽力され多くの有為の人材を社会に送り出されました。

先生は学部長時代に学部学科改組という困難な課題にリーダーシップを発揮され、これを実現されました。社会経済情勢の大きな変化の中で農学に対する要請が関連産業の拡大や農林業の公益的機能への期待等幅広く求められており、それらに対応すべく既存の5学科体制を3学科9大講座に大きく改組し、21世紀の農学と地域産業の発展に寄与し得る教育・研究体制を整えたのでした。それは先生の長年のロマンでもありました。

先生のご研究は土地

改良、酪農経営問題など広い範囲に及びました。ご趣味は囲碁、溪流釣りなど幅広く、お酒が回ると郷里の「貝殻節」をよく聴かせていただいたことが懐かしく思い出されます。「裏を見せ、表を見せて散る紅葉」の如くに逝かれ先生の思い出を懐かしみながら、ここよりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

新任教員紹介

農業生産科学科

教授 山田 宜永



平成二十二年二月一日付にて着任いたしました。出身は長野県飯田市で、大学進学後の

二十七年間を京都と徳島で過ごしました。専門は動物遺伝学であり、実験動物（ラット・マウス）と家畜（ウシ）を対象に、単一遺伝子性形質の遺伝的制御機構の解明、量的形質の遺伝的制御機構の解明という分子遺伝学的研究およびQTLマッピング法に関する統計遺伝学的研究を行ってきました。最近では、トキ保存集団およびトキ近似種集団における遺伝的多様性を解析する取り組み

も進めてきました。

着任後は農業生産科学科動物コースの主任を仰せつかり、慌ただしくも充実した一年を過ごさせていただきました。また、平成二十二年六月十二日に新潟東映ホテルで開催された「新潟大学農学部 家畜育種・繁殖学教室 同窓生の集い並びに樋浦善敬先生退官記念祝賀会」に同席させていただきました。その際、同窓の皆様から暖かいご支援の言葉を頂きましたことをここに記してお礼申し上げます。

前任校で培った実績と経験を生かして、本学の資源動物学教育・研究のより一層の発展に微力ながら貢献していきたいと考えています。宜しくご指導のほどお願い申し上げます。

農業生産科学科

准教授 清野 誠喜



「農学部でマーケティング？」という皆様の声が聞えてきそうですが……（笑）。

こんにちは。平成22年4月1日付で赴任してまいりました清野誠喜（きよのせいき）です。東京都出身で、これまでに東京、秋田、宮城などで大学教員、コンサルタント、県職員、大学教員、として働いてまいりました。専門はマーケティングです。とく

に、農業や食品企業を対象とした

マーケティング、消費者行動などの領域で研究を行っております。これまでも増して、「消費者を理解すること、そして仲良くなれること」が、農業や食品産業における成長戦略を描くうえで必要となっております。微力ながらも、そのお手伝いをさせていただければ幸いです。

今後、農学部同窓会の皆様には何かとお世話となる機会が増えると思います。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

農学部の動向

学会賞受賞

門脇基二教授（応用生物化学科）
日本栄養・食糧学会賞（平成21年5月）

中野和弘教授（生産環境科学科）
平成22年度農業施設学会学会賞（学術賞）

「農業施設における計測と制御に関するシステム工学的研究」

学位取得

応用生物化学科
久保田真敏 博士（学術）
（平成21年3月）

小林 裕之 博士（学術）
（平成21年3月）

生産環境科学科

大野泰之博士(農学・北海道大学)

(平成22年3月)

(平成5年林学卒、平成7年院農修了)

学会・講演会の開催

(1) 農業施設学会創立40周年記念新潟大会(平成22年8月29日～31日)

大会委員長 中野和弘教授

大会実行委員長 大橋慎太郎助教

(2) シリーズ講演会 食品のサイエンステクノロジー

第13回「食で守るわたくしたちの健康」平成22年6月、ときめいと主催 地域連携フードサイエンスセンター

(3) 特別シンポジウム「あなたの被災生活を支える災害食 非常食から医療・福祉・保健機能を加えた災害食へ」

平成22年2月、パシフィコ横浜、主催 地域連携フードサイエンスセンター

(4) APEC海外プレスツアー 平成22年4月、会場 新潟大学農学部、主催 新潟市

内容 災害食に関するレクチャー、及び食品関係の研究紹介(後日、フランス、中国、韓国、日本などで報道された。)

退職

長年、当農学部のため多大な貢献をされた大学院自然科学研究科(応

用生物化学科)教授堀秀隆先生が平成23年3月に定年退職されます。

長年にわたり積み重ねてこられたご功績に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

教員 訃報

福本安正元講師(農専及び運材工学)が平成22年4月23日ご逝去。

石井傳元教授(農業生産科学科)がご逝去。

治部田幸範名誉教授(元農学部農学経営学)が平成22年10月22日ご逝去。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

会 員 訃 報

次の会員の訃報が事務局に届けられています。

山口 毅 (昭28林学)

青柳 康平 (昭24林学)

細貝 敏雄 (昭26農専・農)

松井 文司 (昭24農専・農)

今井 淳 (昭25農専・林)

外内 盛雄 (昭25農専・農)

大庭 啓司 (昭35林学)

渡辺 和夫 (昭23農専・農芸化)

牧野礼三郎 (昭36農学)

渡部 豊悦 (昭29林学)

坂爪 真吾 (平7植物生産)

阿部 光助 (昭23農専・農)

松井 敬一 (昭54農学)

謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

今回の松涛は特集を二つ企画しました。一つは懐かしい農場・

演習林の現在の状況を紹介しました。もう一つは、昨夏が異常な猛暑だったこともあり、地球

温暖化対策に取り

組む研究を取り上げ

ました。多数の方

に編集に御協力を

を頂きました。特

ごさいました。特

集や紙面にご意見

があれば同窓会事

務局へお寄せくだ

さい。

さて、私事では

ありますが、昨秋、

大学時代同期で親

友のM君が亡くな

ったので、紙面

お借りしたいと思

います。M君とは、昭和50年4月に、

五十嵐キャンパスで逢って以来

35年のつきあいでした。飛騨高

山生まれの彼は、大変明るく、

下宿が近いこともあり、大いに



うばかりです。ご冥福をお祈りします。

「東日本大震災(東北地方太平洋沖地震)」に被災された皆様にお見舞い申し上げます。(HW)

遊び、飲み、テスト前は少しだけ勉強し、研究室で徹夜もしたり、多くの時間をともに過ごしました。卒業後、彼は農林省そして外務省に勤務し、多忙な中でも、東京出張の際に電話をすると必ずかけつけてくれ、飲み、語ったものでした。昨年来、ガ